

新たな担い手育成と遊休農地の発生防止

(奈良県曽爾村)

担い手への
農地利用の
集積・集約化

遊休農地の
発生防止・
解消

新規参入の
促進

その他(農業
委員会の体
制強化等)

1 地区の特徴・状況、課題

曽爾村は奈良県の中央部より、やや北よりの東北端に位置し、北は三重県名張市、東は三重県津市、南は御杖村、西は宇陀市に接しています。

村の面積の86%が山林となっている中山間地域で効率の良い比較的緩やかな農地は村の中央を流れる青蓮寺川沿いに集中しており、青蓮寺川を挟んで棚田が形成されています。

水稲の作付を中心に、標高が高く冷涼な気候を利用し、施設栽培でのほうれん草、トマトの生産が盛んで、村の特産品と位置づけ振興を図っています。しかし、生産コストの上昇、価格の低迷、担い手の高齢化等厳しい状況が続いており農業生産量の減少傾向が続いています。



2 課題解決に向けた活動(農地利用の最適化の推進の取組と工夫)

特産品であるほうれん草、トマトの農家数の減少や高齢化による担い手不足が懸念されるなか、曽爾村では新たな担い手の確保の一環として、地域おこし協力隊制度を活用して農業研修生を受け入れており、6名が研修を終了し就農、現在4名が研修中です。農業委員も積極的に研修生を受け入れています。

また、村が新規就農者向けのハウスを建設する農地の候補として、農林業公社が遊休農地化のおそれのある比較的優良な農地のピックアップや、農地所有者との橋渡し等も行っています。

3 活動(取組と工夫)の結果

農業委員が橋渡し役となり27人の農地所有者と新規就農者等の間で約5.5haの利用権設定をすることにより、未然に遊休農地化を防止することができました。

地域おこし協力隊等の農業研修終了後上記の農地で9名が就農し、現在研修中の5名も新規就農を目指しています。